

# 家族の死「なぜ」問い続け

## 阪神大震災20年 遺族調査

6434人の命を奪った阪神・淡路大震災は、遺族に「家族はなぜ死ななければならなかったのか」との問いを投げかけた。朝日新聞社と関西学院大学人間福祉学部が共同で実施した遺族の意識調査からは、遺族がこの20年間、家族の死をどう受け止めようとし、そして今、どう考えているのかが浮かび上がった。

震災による家族の死を、「納得しよう」と努めたことはあるか」「納得できているか」――調査ではこの二つの質問をした。

関学大の坂口幸弘教授（悲嘆学）によると、遺族は家族との死別後、死の意味を問い、自分を納得させる答えを求めるといふ。

### ■家族の死の受け止めを尋ねた2問

ご家族がなぜ死ななければならなかったのか、納得しようと思つたことはありますか
① 納得しようと思つたことはない
② 以前は納得しようと思つたが、今は努めていない
③ 今も納得しようと思つている
ご家族がなぜ死ななければならなかったのか、納得できていますか
① 納得できていない
② まだ少し納得できていない
③ 納得できている

### 家族の死をどう受け止めているのか



「納得できていないが、納得しようと思つていない」の三つのグループに分けた。

結果、納得できている人は、4割強にとどまった。一方、納得できていなくても、あえて答えを求めずにいる人も4割弱いた。

「納得できておらず、今も納得しようと思つていない」の質問に対する答えの組み合わせから、「納得できている」「納得できていない」が、納得しようと思つていないが、今も納得しようと思つていない。また、今も納得しようと思つていない人は、自分が助かったことに後ろめたさを

今も感じている割合が高かった。震災直前を100%とした心の復興度が低い水準にとどまっている割合も高かった。

3グループに分けられない遺族もいた。次男を亡くした70代の男性は、回答の横に「納得はできないでしょう？」と書いた。死は納得できるものでも、そう努めるものでもないという思いだったという。

坂口教授は「家族の死の意味は何かとの問いに、正解があるわけではない。答えを求めることを棚上げにするのも選択の一つ。遺族一人ひとりに自分しか見いだせない生き方がある」と話す。さらに、阪神大震災の遺族の現状を理解することは東日本大震災の遺族の理解にもつながるとして、「遺族の歩みを先回りすることなく、それを尊重し、ともに生きることが社会には求められる」と語った。

(千種辰弥)